

## 南サハリン水域の サケ属魚類漁獲量減少の原因

ソ連国家漁業委員会機関誌「漁業」(1963年9月号)より

訳 高 昭 宏

近年、南サハリン水域の主要漁場では、マス・シロザケの漁獲量が急激に減少している。太平洋海洋漁業海洋学研究所サハリン支所の資料によると、近年のサケ属魚類資源は、マスの場合では偶数年にはその数量が少く、奇数年にはそれよりもっと少いのの特徴である。

チミ川（支流としてナイバ川等がある）、ポロナイ川、それにアニワ湾にそそぐ各河川は、サハリンのサケ属魚類の再生産にとって重要な意義をもっている。

チミ川のシロザケ群の漁獲量は近年、急激に減少した。1943年まで、年間1,000—3,500トンのサケ属魚類を漁獲していたが、1953—1954年に漁獲量は200トンにまで減少し、現在ではだいたいその水準におちついている。

ポロナイ川はサケ属魚類、主にマスの再生産にとって重要な川の一つである。ポロナイ川のサケ属漁獲量は幾年かの間、サハリン南沿岸・東沿岸の漁獲量の26—53%、サハリンの総漁獲量の12—30%を占めていたのである。

チエルペニヤ湾北西部（ポロナイ川河口区域）の過去12年間のマス漁獲量から、偶数年、奇数年にかかわりなく、マスは減少の傾向にあることが分かる。

マスの最大漁獲量が得られたのは1949年、1951年で、その後1956年の初めからマス漁獲量は急激に低下した。

シロザケ・マス資源はスタロドフスク区でも減少した。この区域では、ナイバ川、イナスシ川、ザオゼルナヤ川、ベレバリナヤ川がサケ属魚類の再生産にとって主要な役割をたしている。

漁業の結果をみると、これら河川でのシロザケの最大漁獲量は1950年、1951年に得られ

ている。そして1952年からシロザケ漁獲量は減少しはじめた。

サケ属魚類の漁獲量が減少したばかりでなく、産卵河川に回帰する親魚数も減ったのである。(表参照)

近年サハリンでは、人工孵化技術がいちぢるしく向上した。私たちは卵および稚魚につく病原菌に対する予防措置を講じて、サケ属魚類の卵の孵化および稚魚の飼育のための好条件をつくったのである。

24の養魚場では、生活力の強い稚魚を増産するために、人工餌料が与えられた。1960年に稚魚の生産量は2億8千9百万尾におよんだ。

サハリン州では魚類保護法令の措置にもとづき、産卵河川の河口区域の保護には大きな注意がはらわれており、生物学的、水工学的土地改良が行なわれている。

しかしながら、近年、サケ属魚類の漁獲量は減少しつつけており、減少の程度は特に1958—1959年に目だっている。

太平洋海洋漁業海洋学研究所サハリン支所の1958—1959年の資料によると、1960年にマスが大量に回復すると予想したが、実際にはその年のマスの出現は少なかった。サケ属魚類の数量減少の主要な原因は、海洋生活期間にあると私たちは考えている。

サケ属魚類資源のめっぽうな減少は、外洋における日本の漁業がひき起したものであり、これは近年とくに顕著になっている。

1945年まで(1945年を含む)、日本人はサハリン沿岸区域の大きな産卵河川の河口で、建網だけでサケ属魚類を獲っていた。こうして日本人の漁業は主としてサハリン東沿岸に集中し、主にマスを漁獲していたのである。

1945年までに、日本の水産企業体によるマス漁獲量は毎年3万トんに達していた。

1945—1952年の間は、サケ属魚類の再生産にとって条件がよかったのである。ところがこの期間に、日本人によるサケ属魚類漁獲量は最低の水準に下がった。

1952年から、サケ属の回遊コースにあたる太平洋で、日本のサケ・マス漁業が積極的に行なわれている。したがって今後のサハリンのサケ属魚類漁獲量の減少は、もっぱら日本の漁業のせいと考えるべきである。

1960年に、クナンリ島とエトロフ島で、マスは合計83.6トシしか漁獲できなかった。ところが、その前7年間の漁獲量は1,100トンを下らなかったのである。

1960年は卵の孵化の状態がよかったのに、漁獲量が極端に低かったのは、もっぱら日本の流網と延縄がサケ属の回遊コースをささぎったことを物語っている。

日本の水産企業体は現在、協定水域でしばしば漁業規則を犯している。延縄漁業によってサケ属魚類資源は大きな損害をこうむっているのである。1959年にサハリンの産卵河川では、漁獲物のうち、釣針の傷跡のあるサケ・マスは約1.5%で、1960年にはその数は3%すなわち、約2倍に増大したのである。

こうして私たちの見解では、サケ属魚類資源に有害な影響を与えている主要因は、日本漁船の外洋における積極的なサケ・マス漁業である。

サハリンのサケ属魚類資源を保護し、豊かな漁獲水準を維持するために、今後、太平洋北部水域における流網、延縄漁業を制限する必要がある。(以上)

(表) 産卵面積 100 m<sup>2</sup>当りの親魚尾数

川の 名				1956年	1957年	1958年	1959年	1960年
マ ス								
ホ	ロ	ナ	イ	> 36	< 25	25 — 35	8 — 15	1 — 2
レ	ス	ナ	ヤ	> 36	< 25	25 — 35	8 — 15	1 — 2
ザ	オ	ゼ	ル ナ	> 36	25	12 — 25	5 — 10	1 — 2
ノ	ー	パ	ヤ	37	25	12 — 25	10 — 12	1 — 2
フ	ボ	ス	ト フ	62	37	25	5 — 10	2 — 7
ク	レ	ス	チ ヤ ノ	62	45	30	5 — 10	2 — 7
タ	ム	ボ	フ	62	37	25	7	1 — 2
キ	リ	ロ	フ	62	25	25	7 — 10	2 — 5
シ ロ ザ ケ								
ボ	ロ	ナ	イ	> 10	—	—	20	3
ア		ニ	ワ	5	—	—	—	—
リ	ニ	ト	ガ	—	10	—	—	—
ナ		イ	バ	—	80	—	20	—
チ			ミ	—	—	—	150—200	4

Причины сокращения уловов лососей б в водах Южного Сакапина

(Рыбное хозяйство. 1963. No. 9)

著 者 M.Я. КАЗАРНОВСКИЙ (モスクワ国立大学)  
(エム・ヤ・カザルノフスキイ)

H.M. ЗОЛОТАРЕВА (サハリン養魚場)  
(イ・エム・ゾロタレバ)

(北海道立中央水産試験場研究員)

## 原稿募集

増殖, 特に内水面及サケ, マスに関連する調査報告, 文献紹介,  
体験記, 論説, 小説, 随筆または写真などの原稿をお送り下さい。  
採用のものには基準により薄謝を進呈いたします。

宛 先 札幌市中の島 北海道さけますふ化場  
または 北海道立水産ふ化場内

「魚と卵」編集委員会